

佐渡アイランド集落ツーリズム構想と集落経営を考える

三度のメシより佐渡が好き！！ 佐渡アイランド集落ツーリズム研究会 室岡ひろし

▼修士論文『佐渡らしさの発見とその伝え方』①

“佐渡らしさ”の発見とその伝え方

東京理科大学工学研究科超空間専攻視覚研究室 室岡 啓史
aroll11@hotmail.com

1. 研究背景および目的

日本という国は、古来より極めて稀有な日本人としてのアイデンティティ“らしさ”を生み出し、継々と受け継いできた。武士道精神・住び慣ひの心・八百萬の信仰・母国中心意識などといった独特の日本文化は世界的に見ても中東部である。現代におけるグローバル化の中で失われつつあるこの精神性＝“日本らしさ”を大切にしたい。くしくも藤原正喜の“国家の基骨”がベストセラーになり國のあり方に對する意識が高まり、また安倍内閣は“美しい国づくり”を旗印その政策が理解されている。

本研究は、そういった本質の“日本らしさ”の一つと選りこぎることができる“伝統的な集落内に生きたる”という現象を見つめ直し、恒久的な集落コミュニティの維持・集落景観の保全を可能とする手法を創出することを目指す。江戸時代に生きた尾花芭蕉が“美の源流”において“源白の思ひやまず”と記すように、“源初め”や“はかなさ”といった日本人の持つ精神の感性が存在する。そういった思想の現代における生きかたへの投影について考えることに興味がある。“日本らしさ”を大切にすること、生きかたを研究する視座をアースとして佐渡ヶ島を選定した。それは、私の両親の出身地という個人的事情であることのみならず、佐渡ヶ島が“日本の縮図”と形容されていることによる。

2. 調査概要

調査では、佐渡ヶ島で暮らす人々に対してヒアリングインタビュー（佐渡ヶ島の島民約20名）や、環境に対する意識・自己と人の繋がりなどについて1回、2回の実地調査を行った。これは現地でも暮らす人の生の声から佐渡ヶ島の現状を把握し、今後の展開へと生かすためである。調査対象者は、佐渡ヶ島で楽しく暮らす人々を条件に、主に1人づつでヒアリングインタビューを実施した（偶然の出逢いによる協力も含まれる）。調査は2016年4月20日～5月6日と2016年7月16日～9月3日の期間に行った。調査範囲は全島とし、島内を自動車で行き基本的に対象者の住みかたに調査を行った。協力者は島内出身者21名、島外出身者25名の計46名である。島内出身者のみならず、島外出身者を対象として加えたのは、生い立ちや境遇の異なる人々の相対的評価をするためである。

また、調査の一環として5月9日、9月30日～10月1日、12月30日～1月22日の3回に分けてワーケーション企画・開催し、参加者へのアンケート調査も行った。

3. “佐渡らしさ”の発見（集落を見る）（図1～図4）

インタビューの中から得られた“佐渡らしさ”の要素を抽出する。①日本の諸島の中で最大であり（沖振本島を除く）、②離島の南・北端とされる北緯38°線が島の中央を通過していることにより1700種もの植物種をもつ（注：近畿島の植物種は1370種）、③南西北方向に伸びる島二山型の地形により山頂に多種植が生じ、また時間距離（移動に要する時間と距離の関係）が複雑化する。④思想起源の遠慮地・佐渡金山の聖域・北端の象徴といった、島外からの人の流入が日常化したきた歴史をもつ。⑤全島の1/3にも上る3つの純粋な神社に併置されたながら残存する、赤鬼・黒鬼・徳田おきき・文弥人形といった伝説的要素が受け継がれ保存されている。⑥自然的記念物であるトビの野生産地と興じて保護が進み、生態環境改善を可能とする環境保全型農業への転換が進んでいる。⑦町界線における種々の強人だけでなく海・山の恵を享受できることから、およそ60万人分の食料確保が可能とされる。伊江戸・京都・西日本の影響により島内に異なる方言をもつ（共通の方言としては図2と参照）。

しかもながら調査を通して最も強く感じた“佐渡らしさ”として、⑧多様な集落および種々の集落形態がコンパクトに凝縮されている。という重要な要素があると考える。なお、①～⑧の要素をもつて“日本の縮図”と置かれる所以であると結論付ける。

3.1 佐渡ヶ島の集落形態（図5～図8）

集落単位は、自然村としての集落と現在の行政区分を基礎として、生態や立地・環境形態から、漁村・商漁村・種船村・半農半漁村・農村・山村・新興村の7つに分類できる。集落とは、一つの水系のある流域に発生する共同体と考える。集落単位は水と平地であり、生活のためには水が欠かせないため、水の確保が容易な川沿いを基本としながら、比較的平坦な場所に集落が発生している。特に伸じ集落形態が顕著である。

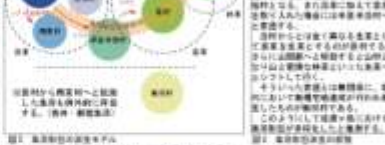
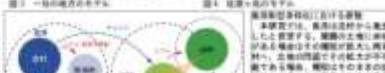


図1 佐渡ヶ島における集落形態とその分布

3.2 佐渡ヶ島における各集落形態の分析（図9）

3.1で分類した各集落形態が、佐渡ヶ島においてどのように分布しているかを見てみる。
①集落の総数である漁村は数少ない。南津・相川・徳田・小木といった昔から栄えている地域に漁業村が多く見られる。種船村は狭帯木だけである。
②半農半漁村は全島の海岸線に沿ってほぼ連続して存在する。加茂海岸の側面は、集落だけではなく水産物も持っているため、海に面していないとも半農半漁村と分類される。
③農村は国許野原全域に広がっている。島内のほとんどはこれらの集落から生産されているといえる。小佐渡の南西部にも多く見られる。山村は小佐渡に存在する。（大佐渡の山には集落は存在しない。）

④本研究の分類においては、漁村4、商漁村84（瀬川が細分化されているためが多い）、種船村1、半農半漁村114、農村106、山村12、新興村0の合計321集落となった。

3.3 集落形態の差異による建築物の典型配置（図10）

3.1で分類し、3.2で島内の分布を示した集落を、実地調査によって得られた具体的な集落地における集落の配置に関して分類して一般化する。

①漁・商漁村・種船村 各住戸が海岸に伸びることで成立している。これは、各々が所有する船が、海に面している保管できることや閉居の広さに比例して船倉が高層となるという集落の制度としての形態という歴史的背景が多い。
②半農半漁村 障子が集落でもないが農村のように閑散ともしない集落が多い。こういった集落では、柱と納屋・蔵が平行配置となる場合が多い。

③農村 島端と海道に納屋・蔵が建っているのが一般的である。これは島端からのアクセスの容易さ、移動距離の短さといった理由のみならず、かつては例外的に一般的であった畜舎が畜舎にさらされるという防犯上の理由もあり、畜舎型の配置構成になったという数もある。

種船率（敷地面積に対する種船面積の割合）について分析を行うと、最大で70.2%、最小で21.2%とかなりの開きがあることが分かった。“佐渡ヶ島”という大きな島端みでは開きがないほどの差の差が存在している。

以上のように集落形態の多様化の度合いと建築物の配置の変化には相関があり、種船率の異なる数値にゆとりがあればある種、柱・納屋・蔵が最適化の構成へと変遷していくことが分かる。

4. ワケーションの発見（集落を見る）（図11～図17）

島内外の人が未知の集落と知り合える（図11）ことで、佐渡ヶ島の魅力を発見し、その人にとっての大切な場所として位置づけられる可能性を見出すためにワークショップのワークショップを企画・開催した。（図11）

2016年の1年間で本研究のワークショップ参加と結果の検討として延べ30人以上が参加した。アンケートの結果について以下に示す。

“こいつは佐渡ヶ島”は調査対象者の水田と敷地を活用して行った。開業から15人の知人を呼び田植え・新穀リ・レタチャーを行い、食べることを両者する機会とした。レタチャーは島内参加者もあり、30人を超えた。国・都・道はより集落の佐渡ヶ島のイメージはあり見やすいものであったが、来島後は3割以上の方が良いイメージと評価している。開業農村においての滞在延長へのイメージが大きいことが分かった。また3割以上の方が島外の一つとして活用を希望しており、再来島も5年以内の希望が半数を超えていることから“移住とはいかないまでもまた行きたい場所”として参加者には受けつけられたことが分かる。島端についてと関心が多く、単なる集落観察機会としてではない意義を改善する手段としてのワークショップの可能性を示している。“さむいっつち佐渡ヶ島”では、長は真冬の集落を回り夜は温泉家で冬の晩を過ごした。島内外から10人ほどの参加があり交流の場とすることができた。さだも人も島内の集落と知り未知の佐渡の魅力をそれぞれに発見した結果となった。このようにワークショップ形式で集落を巡ることによって、“佐渡らしさ”を島内外の人へと伝えることが可能であることが分かった。

4.1 生きかたの実型（集落に住む）（図18～図20）

図18よりヒアリング・インタビュー対象者のデータを示す。協力者は、結果として80代男性が最も多かった。また、図19より50代以上はさだもが多かった。たひの島人のほうが相対的に多かった。図20より、商漁村にはさだもの島住者が多く山村や農村にたひの島人が居住していることが分かる。

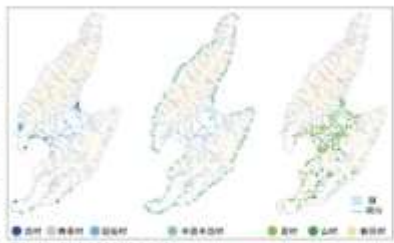


図9 佐渡ヶ島における各集落形態の分析

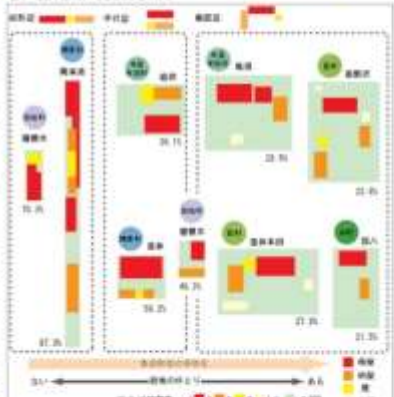


図10 集落形態の差異による建築物の典型配置

図11 集落の発見によるワークショップの様子

“佐渡らしさ”を伝えるためのワークショップの企画・開催は、島内外の人々の交流を促すことも目的としている。種船率、島内出身者の割合、年齢の分布も考慮して実施した。それは種船率の異なる島内出身者の交流を促すことも目的としている。また、ワークショップの企画・開催は、島内外の人々の交流を促すことも目的としている。また、ワークショップの企画・開催は、島内外の人々の交流を促すことも目的としている。

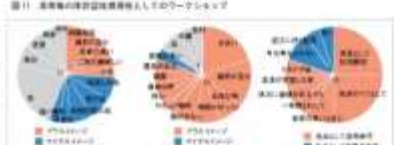


図12 集落形態の発見によるワークショップの様子



図13 集落形態の発見によるワークショップの様子



図14 集落形態の発見によるワークショップの様子

5. 1 職業・住居層 (表 1)

表 1 は、調査対象者の一覧である。さどのものは高校卒業後に島を出る機会が多いが、対象者は平均29歳で専業主婦としての結果となった。大学・就職を含めて10年ほど島外で過ごす傾向があると言える。また、たびのものは平均33歳で移住しており、決してタイアップ後の年齢を越えず場所としての移住ではないことが分かった。

職業に関しては、さどのものは家庭を営んでいる場合が大半で多く、たびのものは関連してはNPOスタッフや自営業を営んでいる傾向にあることが分かった。

住居在任層 (住居層) に関しては、さどのものの平均が3.8年、たびのものの平均が9年という結果となり、半数としては4年以上の滞在があることが分かった。

5. 2 移住・定住の意思 (図 21)

佐渡へ島における住居の理由として最も多かったのは、佐渡の環境に魅力を感じたということであった。島外からの移住としての最大の理由である。さどのものは長男・あるいは自分の世代であるという思い立ちのもと存在している傾向がやはり強い。出身の地によって、置かれる境遇が全く異なっている。

5. 3 敷地における合理的な選択 (図 22)

図 22 は、4 年前後に移住する 4 人の事例から佐渡へ島の農村風景へと移住した。たびのものは事例 (T-11・T-12) である。従って 300m 以内は水田・畑も確保している。また、敷地内には多くの建物が存在している。これらは自然発生したものもあるが、人為的に育てられているものも少なくない。必要のために存在している建物の一棟が空気に集まる。①スズキの冷たい北風を遮るための防風林、住宅の建材、またスズキは乾燥させて薪ストーブなどの着火剤として活用する。②ヒノキ: 玄関先に植えることで風除け効果がよいとされる。③ドリ: 湿気などの防湿剤として活用されてきた。④アサギ: 裏からアサギが採れる。⑤シノブ: セウソウチカ: 古道具の材料や壁の強化材としての竹小舞に活用される。⑥アサギ: ヒノキの一種であり、大黒柱などの建材に使用される。⑦ツツミ: 薪の一種であり、古道具などに使われてきた。

以上挙げたように、先祖が作り上げた意味ある環境の恩恵をそのまま享受しながら暮らしているのが実情である。

5. 4 漁村系と農村系の伝統的な空間構成 (図 23)

住居における古民家の特徴を挙げる。①オマズ (オマズ・オマズ) という、天井高 3.5m 前後もある気候の大きな空間が存在する。その空間は、季節として使用されたり、伝統行事におけるハレの空間として活用されてきた。②畳床は畳敷瓦といわれる黒色瓦状のある瓦が一般的に使用されており、真夏には日光によって美しく光輝く。③島内の古民家は増築型がほとんどを占める。④漁村系の住宅はトリアーといわれる公共空間が各住戸に専らした。建物の平面構成となっている。

5. 5 古民家半再生 (図 24)

古民家半再生は従来において「家の作りやうは、夏をむねとすべし」と語られている。つまり、古民家は夏の暑さを凌ぐことが最優先であるために気密性が低く、真冬は過ごしにくいという短所を持っているのである。古民家を所有する対象者 (10 事例) のうち、古民家再生として大規模な改築をしたケースが 3 事例であった。しかし、それとは異なり、住みながら少しずつ改築を進めている事例も存在した。本研究ではそれを「古民家半再生」と名付け、季節の住み分けと改修の手段と可能性について以下に述べる。(事例 T-11・T-12) ①家の一面において断熱化を行い、冬は基本的にその空間で過ごす。冬は断熱的に暮らす。つまり、「夏は広く住み、冬は狭く住む」ということである。②時間と資金の余裕をつくりながら、改修工事として、家の中の仕事空間など使用頻度の高い空間にさらなる断熱化工事を行い、冬の活動領域を広げている。すなわち、「夏は広く住み、冬も広く住む」ということである。③大工との繋がりによって技術の伝達が行われることや自作作業により低予算で改修が可能となる。

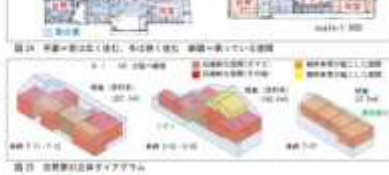
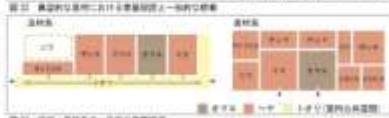
このように最低限の改修によって、日常の生活として伝統的な環境および景観を保全することが可能になると言える。

5. 6 覆っている空間 (図 25)

佐渡へ島における空間の数は 1170 戸以上と書かれている。また、母屋のみならず納屋や裏といった副建物における居住層用としての可能性が大きい。概ね、島内では母屋は雑草が生えやすいため、裏・小畑は現状を維持する機会が多い。そのため、良質な古材が使用された魅力が顕著になっていると見える。そういった古民家の潜在能力を引き出している事例を調査に準じ、古民家活用キーワードとして位置づける。

表 1 対象者の属性

属性	さどのもの	たびのもの
性別	男性 10人、女性 10人	男性 10人、女性 10人
年齢	平均 29歳	平均 33歳
職業	専業主婦 10人、自営業 10人	NPOスタッフ 10人、自営業 10人
住居在任年数	平均 3.8年	平均 9年
移住理由	環境の魅力 10人	環境の魅力 10人



6. 人の繋がりについて (集落と繋がる) (図 26・27)

集落と繋がる手掛の構築として、佐渡へ島における人と人との関係がどのように形成されているのかについて明らかにする必要がある。そこで、対象者に対して日常においてどういった人・コミュニティとの関わりを持ちながら生活しているのかについてのヒアリング調査を行った。主にさどのもの・たびのもの・島外者・島内者・コミュニティ・島外者・島内者の分類によって各個人がどういった繋がりを持っているのかについて考察する。図 27 より、集落との繋がりが強い「集落繋ぎ型」から島外との繋がりが大層な「島外交流型」まで様々なタイプが共存していることが明らかになった。

6. 1 さどのもの・たびのものの繋がりが

彼らは、お郡町の標高 300m 程度の山頂に位置する集落である。さどのもの 8 世帯 13 人・たびのもの 7 世帯 18 人、合計 15 世帯 31 人の小規模な集落である (一世帯あたり平均で 2.1 人)。住まいに関して、たびのものは既存集落を利用しているのが 3 世帯 (13 世帯)・大工+居住者が建築して住んでいるのが 3 世帯 (4 世帯) さらに島内からももう 1 世帯の移住予定がある。移居中である。この諸人集落では半数以上を占めるたびのものが移住しているのに対して調査を行ったところ以上の 3 つの集落が浮かび上がってきた。

①人づての紹介が強いこと。彼らは在の島内夫妻 (T-10) 今田伸野の民衆 (T-09・T-10) といった人物によって集落の繋がりが築かれたためであることが分かった。②便利な山村であること。図 30 に示しているのは自動車を使用した場合における集落から島内への移動時間地図である (中心点から各地へ向かう方向と所要時間が異なる)。これより山村であるにも関わらず、金井の市街地、佐和田の集落、松川の官公庁、阿津の集落、小木の集落などへと移動が容易であることが分かった。このことから山村であるにも関わらず、利便性の高い集落であると言える。

このことから佐渡へ島においては人里離れた山村エリアにおいて移住が増加しているという現象が起きていることが分かった。この流れを先述の図 5 で説明することができる。図 29 より、移住可能性については集落の発生と関連のペナルティが存在していると思定できる。①インターネットが漁村系と農村系と物理的・心理的距離が近く、②集落の発生がため集落系を傾向していることが分かった。また、調査対象者所属集落分類においても島山村への移住者が多いことが分かった。

山村や農村は移住者にとっての受け皿として有効な集落なのである。大野島が名付けた集落系は、他の地方と同じように佐渡へ島にも存在するであろう。それらは今後、発展を持つのではなく、無常態として存在する必要がある。そのためたびのものの移住受け入れ先として活用することで相補の関係が構築可能であると考える。

6. 2 役割分担 (図 31・32)

佐渡へ島は「日本らしさ」の一つである集落で構えることができる。さどのもの・たびのものが共存する佐渡へ島においては島外との食料供給の必要性が深刻になりつつある。さどのもの・たびのもの関わりが強い繋がりを各個人にもつづける存在をさど・たびから文字づつ取って「さびのもの」と名付ける。さびのものには集落と島外者をつなぐ役割が担われている。そして先述から受け継いだあたりまえの生活を守り続けてきたさどのものにはその生活をこれらも守り、島内者の繋がりに対して認める必要がある。どちらがなくても佐渡へ島における島外との成功はあり得ない。

7. 地域再生について (集落を話そう！)

3~6 まで述べてきたように、佐渡へ島の集落は相対性が面白い。そこで、それらを活用するような新しい集落の過ごし方として「佐渡へ島集落フォーラム」を構築する。5.5 および 5.6 で述べた手掛を用いて各集落の空いている古民家や納屋を有効に活用するための「集落の家」として誰かが集まる場所とするのである。それらがネットワークとして繋がりあがるという行為の中で「佐渡らしさ」を大いに誇ることができると考える。

8. まとめ

本研究において、集落の多様性という「佐渡らしさ」を発見した。そして「集落の家」においてその魅力を人を含めて島内外へと伝えることによって集落のコミュニティや景観の維持が行われ得ると考える。そして今後、佐渡へ島を日本のモデルとして位置づけていくことにより、「佐渡の伝統」ということにはなる日本の「日本らしさ」を多面的に誇ることができると考えるのではないだろうか。

表 2 移住者の属性

属性	さどのもの	たびのもの
性別	男性 10人、女性 10人	男性 10人、女性 10人
年齢	平均 29歳	平均 33歳
職業	専業主婦 10人、自営業 10人	NPOスタッフ 10人、自営業 10人
住居在任年数	平均 3.8年	平均 9年
移住理由	環境の魅力 10人	環境の魅力 10人



図 27 集落との繋がりに関する分類

表 3 移住者の属性

属性	さどのもの	たびのもの
性別	男性 10人、女性 10人	男性 10人、女性 10人
年齢	平均 29歳	平均 33歳
職業	専業主婦 10人、自営業 10人	NPOスタッフ 10人、自営業 10人
住居在任年数	平均 3.8年	平均 9年
移住理由	環境の魅力 10人	環境の魅力 10人

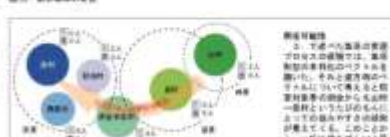


図 28 移住者の属性

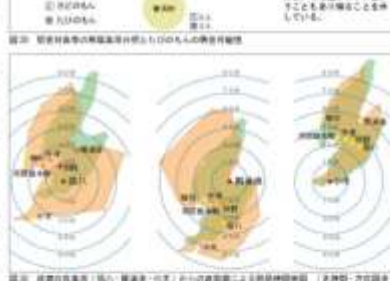


図 29 移住者の属性



図 30 移住者の属性

佐渡の農山漁村の生業を大切にし、
集落でかけがえのない時を過ごす
人と人とが繋がっていく世界観



【出典】集落のプロモーションビデオのたたき台（制作：スタジオマクワンカ）

▼ 『佐渡アイランド集落ツーリズム』のイメージ

 室岡ひろしさんが写真14件を追加しました。
2月19日 20:29

宿根木

佐渡アイランド集落ツーリズム@宿根木

伝統的建造物群保存地区に新潟県内唯一指定されている宿根木は、佐渡唯一の個性あふれる集落です。

北前船の廻船問屋で財を成し、船大工がつくった集落だと言われます。密集して寄り添うように家々が建ち並ぶ様子は圧巻。景観保全活動がいつでも現在進行形です！



+10

 室岡ひろしさんが写真17件を追加しました。
2月19日 20:28

松ヶ崎

佐渡アイランド集落ツーリズム@松ヶ崎

日蓮聖人が流れ着いたといわれる松ヶ崎。日蓮聖人の懸掛け石があったり、『屋号の里』として屋号看板や古民具等を玄関先にディスプレイ。風が強いため、屋根の高さが抑えられ、ヒューマンスケールの街並みが形成されています。

寺社仏閣、お禅の木など見所もたくさんあります。近年、海側にバイパス道路ができたため、集落内の交通量が抑えられ、よってより安全なムラ歩きができるようになって参りました。



+13

 室岡ひろしさんが写真7件を追加しました。
2月19日 20:44

東鴉島

佐渡アイランド集落ツーリズム@東鴉島

地名の鴉島とは、写真の小島が鴉が羽を休める島だからだそうです！急な坂道を登ると、石垣の棚田が見えてきます。石垣は佐渡では比較的珍しい！既に雪解け水が涸々と流れ、春のおとずれを感じる体験をしました！



+3

【出典】facebookの室岡ひろしページ『佐渡アイランド集落ツーリズム』

(左から宿根木、松ヶ崎、東鴉島)

▼日本版『DMO』構想とは・・・

日本版DMOが全国で展開されております！
佐渡市も佐渡版DMOを立ち上げるべく、
鋭意準備中です。

※DMOとは・・・

Destination Management/Marketing Organization :
デスティネーション・マネージメント/マーケティング・
オーガニゼーションの略

観光物件、自然、食、芸術・芸能、風習など地域にある
観光資源に精通し、地域と協働して観光地域づくりを
行う法人のこと。

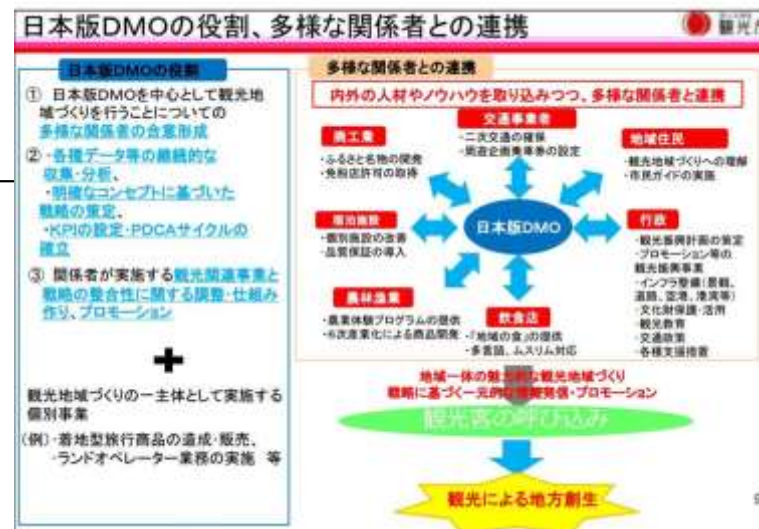
私は、DMOとは『旅行商品の地産地消を推進する組織』
のことだと理解しています。

DMOづくりの精神は、下記ではないかと思えます◎

- D ダメで
- M もともと
- O OKよ！



先般開催された見並陽一氏によるセミナー『日本版DMOを核にした観光地域づくり』でも観光地域づくりを行うためには、地域文化その土地らしさこそ重要である。地域の合意形成についても10年~20年かかることなので、焦りは禁物=気長に取り組むべしというお話がありました。



【出典】観光庁WEBサイト

▼集落のチカラは、佐渡のチカラ！！！！



集落のチカラは、佐渡のチカラ!!!

多様な集落が生き活きと輝く佐渡を実現します!!

- 1 集落ツーリズムによる雇用創出
- 2 佐渡の玄関口整備による観光振興
- 3 島内交通インフラの整備による産業振興



▼佐渡の魅力 10項目 チェックリスト ⇒ 知っている：✓ 知らなかった：？

／10

- ①日本の離島の中で最大である。（沖縄本島を除く）
- ②植生の南・北限とされる北緯38°線が島の中央を通過していることにより1700種もの植物相をもつ。
(cf. 屋久島の植物相は1370種、佐渡は長崎県と同程度の1700種)
- ③南北方向に伸びる一島二山型の地形により気候に多様性が生じ、
また時間距離（移動に要する時間と距離の関係）が複雑化する。
- ④思想犯の遠流地・佐渡金山の繁栄・北前船の来航といった、島外からの人の流入が日常化してきた歴史をもつ。
- ⑤全国の1/3にも上る32の能舞台が神社に併設されながら現存する。
- ⑥鬼太鼓・能・佐渡おけさ・文弥人形・春駒・花笠踊りといった伝統芸能が受け継がれ保存されている。
- ⑦特別天然記念物であるトキとの共生に意欲的で、生息環境改善を可能とする環境保全型農業への転換が進んでいる。
- ⑧平野部における稲作が盛んなだけでなく海・山の幸を享受できることから、およそ60万人分の食料確保が可能とされる。
- ⑨江戸・京都・西日本の影響により島内に異なる方言をもつ。
- ⑩多様な集落および建築形態がコンパクトに凝縮されている。

▼ 『佐渡アイランド集落ツーリズム』構想の実現

佐渡の集落は多様で個性豊かで素晴らしい！
活き活きと暮らせる集落づくりを実現します！

佐渡の集落を守り、輝かせる！！

↓ 限界集落も増え、待ったなしの状況です。
その解決のためには・・・

『佐渡アイランド集落ツーリズム』構想

↓ 佐渡の集落を電気自動車で巡る新しい観光。
ストーリーのある旅づくりを構築。※①

『佐渡アイランド情報化大作戦』

↓ 地域おこし協力隊の仲立ちによって、
集落の方から佐渡の小中高生、Uターン者へ
集落の魅力を教えていただく機会を創出。

ITで『佐渡の集落多様性』を世界に誇る

↓ 一人ひとりが集約した情報は多言語対応の
WEBサイトを制作し世界中に発信します。※②

佐渡の集落の守り人『佐渡人』の育成

佐渡を大切に思う心と生活できる懐のある
『佐渡人』を集落の守り人として育てます。



『集落環境・景観を守るルール』づくり

古民家再生、利活用による受入体制構築

一社一村運動、CSR、『生き方の博物館』

『食とエネルギーの地産地消』を目指す！

集落内の地域教育、観光振興、雇用創出
(コミュニティスクール=みんなの学校) (生業ハローワーク)

『子育て¥0の島づくり』を目指す！

Uターン、孫ターン促進、交流人口増大



韓国・農村愛一社一村運動

韓国では都市への人口集中が激しく、農産物の自由化問題も加わり、都市と農村の対立が社会問題化。韓チリFTAの発効がきっかけに。

農村愛一社一村運動(2004年～)

一つの企業が一つの農村を支援しようとする考えにもとづき、一つの企業が一つの農村と姉妹提携を結び、多様な交流活動を持続的に行うことによって、コメなどの農産物開放で、苦しくなった農業・農村を取り巻く環境を改善するために展開する運動。全国経済人連合会、農協中央会、文化日報が中心となって展開。

農作業支援

農産物購入

企業ノウハウ
を使ったビジネス
支援

- 運動開始から2年半後には、韓国にある4万余りの集落(マウル)の約3割をカバーする提携(12,975件、2006年12月時点)が成立
- 提携主体の内訳(2008年6月時点):サムスン電子を始めとする企業(41.8%)、官公署(14.5%)、農協(11.4%)、学校(7.5%)、消費者団体(5.9%)、社会・宗教団体(5.3%)

出典：経済産業省地域経済産業グループ(平成22年12月)

出典：「韓国における一社一村運動の展開要因と課題」(張、中塚、高田)

静岡県「一社一村しずおか運動」



出典: <http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-630/issyaissorvi/index.html>

概要

- 農山村と企業が対等な関係のパートナーシップを組み、それぞれの資源、人材、ネットワークなどを活かした双方にメリットのある協働活動を実現することを目的。
- 県は農山村と企業の要望をコーディネートする取組と位置づけ。PR活動や農山村と企業の交流会、活動資料の作成などを持ち出して実施(09年度207万円)
- 06年度から認定制度開始。認定基準は協働活動であること、地域活性化の活動であることに加え、活動が継続して行われる見込み(3年以上)があること。
- 認定事業については、県において広報活動を実施。

実施実績(平成22年11月現在)

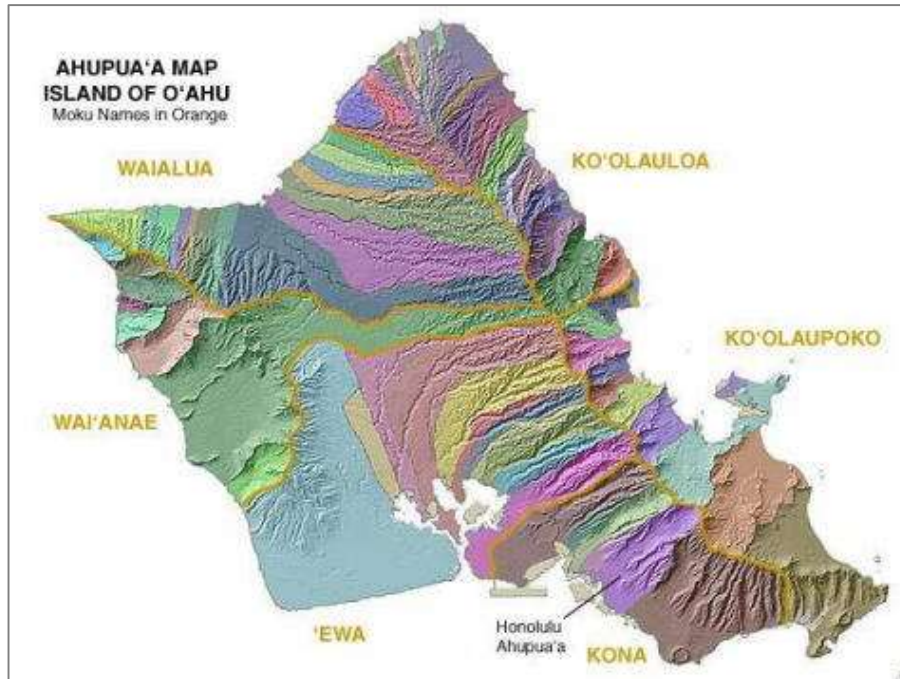
年度	企業名	内容	年度	企業名	内容
06	アストラゼネカ(株)	棚田保全、地域貢献	08	(株)エクノスワタナベ	遊休農地を利用した環境保全(水生生物の保全)、自然観察会の開催
06	(株)ポッカコーポレーション	里山保全、地域貢献	09	静甲(株)	地域の環境整備課業、地域資源を活用した新商品の開発支援
06	(株)フジヤマ	遊休農地解消、環境保全	09	不二総合コンサルタント(株)	棚田の保全活動、環境保全活動
07	静岡大学農学部	茶園管理等農作業、集落の環境保全	09	藤枝市総合病院	地元食材を活用した病院食の提供による地産地消の推進
07	富士錦酒造(株)、(株)平喜、松崎小売酒販組合	棚田米による新商品の開発販売、売上の一部を棚田保全活動に寄付	09	社会福祉法人ハルモニア	遊休農地を活用したコンニャクイモの栽培、観光農園の栽培管理
07	富士常葉大学環境防災学部	農業体験を通じた棚田保全活動	09	(有)フジ化学	地域の環境保全や営農補助
08	居酒屋 賤機はん兵衛	店舗として棚田オーナー、地元食材を活用した地産地消の推進、売上の一部を棚田保全活動に寄付	09	(株)季咲亭	地域特産品の開発と地産地消の推進
08	(株)遠鉄トラベル	里山保全、農作業、地域貢献	09	ナカダ産業(株)	地域の環境保全
08	明治製菓(株)東海工場	里山の保全及び活性化イベントでの協力(アーモンドの星作り)	09	(株)ウェブサクセス	棚田保全活動等の広報への支援、人的支援
08	(株)季咲亭	遊休農地解消を活用した野菜等の栽培、地域の環境整備、地域特産品の開発と地産地消の推進	10	共立印刷(株)	生態系・水質保全向上対策事業(ホテルの星づくり)農業体験などの農用地の有効活動支援対策事業

出典：経済産業省地域経済産業グループ（平成22年12月）

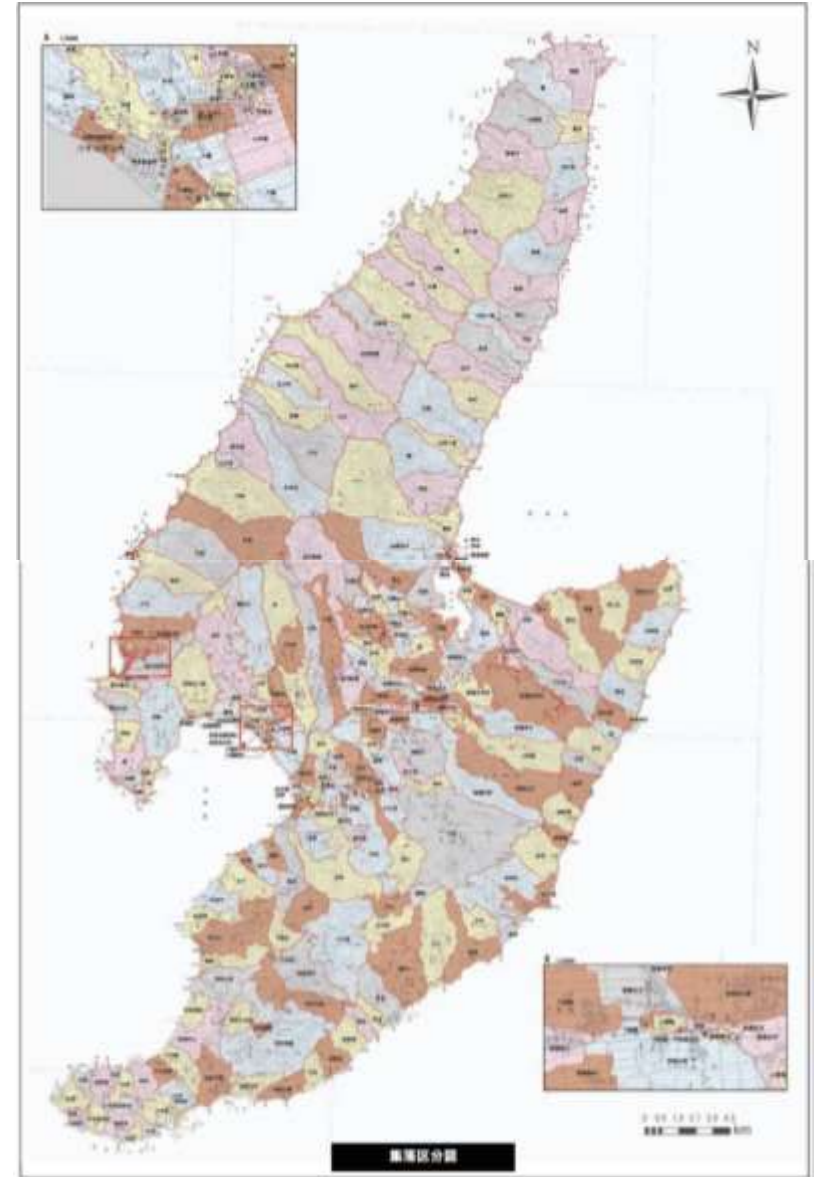
▼ 『佐渡アイランド集落ツーリズム』 構想実現のために！

◆アフプアア (AHUPUA`A) について

アフプアアは山頂から海岸までの渓谷の範囲をひとつの共同生活区域と規定し、自給自足的な経済社会が発展した。この境界線にブタの頭を模した木製偶像が備えられたことからこの概念をアフ（頭）プアア（ブタ）と呼称するようになった。アフプアアは、古代ハワイのもっとも基本的な土地利用単位であり、生活の単位であり、社会経営の単位で「きちんと閉じた」体系であった。40ヘクタール～4,000ヘクタールほどの規模。



【出典】 ウィキペディア（フリー百科事典）



【出典】 佐渡市歴史文化基本構想 佐渡市教育委員会

▼ 『佐渡アイランド集落ツーリズム』 構想実現のために！

12

◆ふるさと見分けについて

2016年8月10日（水）に「ふるさと見分けで地域資源を掘り起こす」

@上横山を決行しました！

東京工業大学桑子先生、新潟大学豊田先生、集落の皆さん、メディアの方々
総勢15名にて約3時間のムラ歩きとなりました。

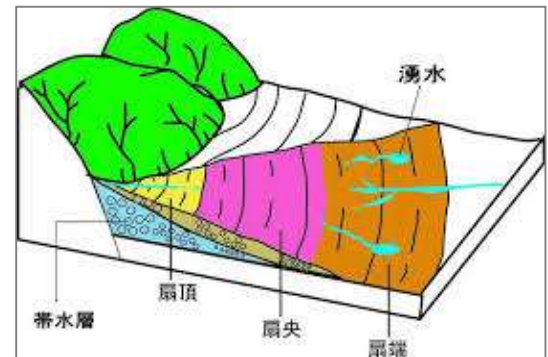
雨になって、風になって、光になって、歩いてみよう！

様々な感覚を研ぎ澄まして地域の魅力を再発見する勉強会です。

水になったつもりで、上から流れに沿って歩いてみるというのが分かりやすいイメージです！水源である旧吉井村の水力発電所跡地からスタートして、集落の上部分にあるファームポンド（ため池）までをメインに歩きました。

時を超え、『空間の履歴』（桑子先生の言葉）に思いをはせながら、皆さんと歩き、貞心堂で最後のまとめをやりました！

- 水になって地形を見ると高い所から低い所への流れが見えてくる。
- 各集落にどうやって水を分配するかの想いについて、分水を見ることで見えることもある。
- 上横山は長江川水系の扇状地であり、上の方は水はけがよく、もともとは畑であった。
下の方は水はけが悪い場所も多く、深田となっていた部分もあった。
- 昭和44・45年に上横山では、田んぼの基盤整備が行われた。
- 地元の方は見慣れた風景であっても、外の目でみるととても素晴らしい魅力がゴロゴロ転がっている。
- 地名や古地図について調べると分かることがたくさんある。



【出典】ひむか教育用コンテンツ集

▼ 『佐渡アイランド集落ツーリズム』 構想実現のために！

13

◆上横山マーケットについて

【期日】2016年7月31日（日）10時～14時

【場所】あいぽーと佐渡 催事スペース内

【目的】上横山集落の魅力の発信、
地産商品の販売による魅力の伝達のため

『上横山マーケット』とは上横山で採れた野菜、果物や加工品を販売し、その素晴らしさを島内外の方に知っていただく試みです。上横山マーケット@あいぽーと おかげさまで、完売しました!!! また、会場では上横山集落の写真や、『上横山大百科』を展示して、上横山の魅力をお伝えいたしました！

【総売上】13,150円

【出展者】5軒

【売上】13,150円÷5軒=@2,630円

【商品数】14種類95商品

【人数】41名

【客単価】13,150円÷41名=@320円

【平均数】95商品÷41名=@2.3商品

※売り上げの10%はハーバーマーケット実行委員会へ

⇒自宅の庭に生っている野菜・果実がお金に代わるという成功体験。

孫へのアイス代、祭のお小遣いといった『生きたお金』の使い道。



▼歴史的建築物の保存・利活用によるマチ・ムラ活性化！

◆兵庫県篠山市の一般社団法人ノオトについて

⇒建築を直し過ぎない、サービスを安売りしないことにより、上質な空間の創出とブランド化に成功。

ノオトはアソシエイツとして運営しており、世界観を全スタッフで共有していることが秀逸。国家戦略特区認定。



◆鹿児島県奄美大島の伝泊 奄美について

⇒奄美大島出身東京在住の建築家が主体となって進めているプロジェクト。建築基準法等の法令順守による進行。

伝泊とは、[伝統的/伝説的な建築]を次の時代につなげるために宿泊システムを組み込んだ宿や活動のこと。

「奄美大島の伝統を残し、島の良さを伝えたい。」それが奄美で営む「伝泊」。



◆奄美における伝統建築の7つの条件

宿泊していただく建物は、50年以上経った奄美大島の伝統的な建築です。

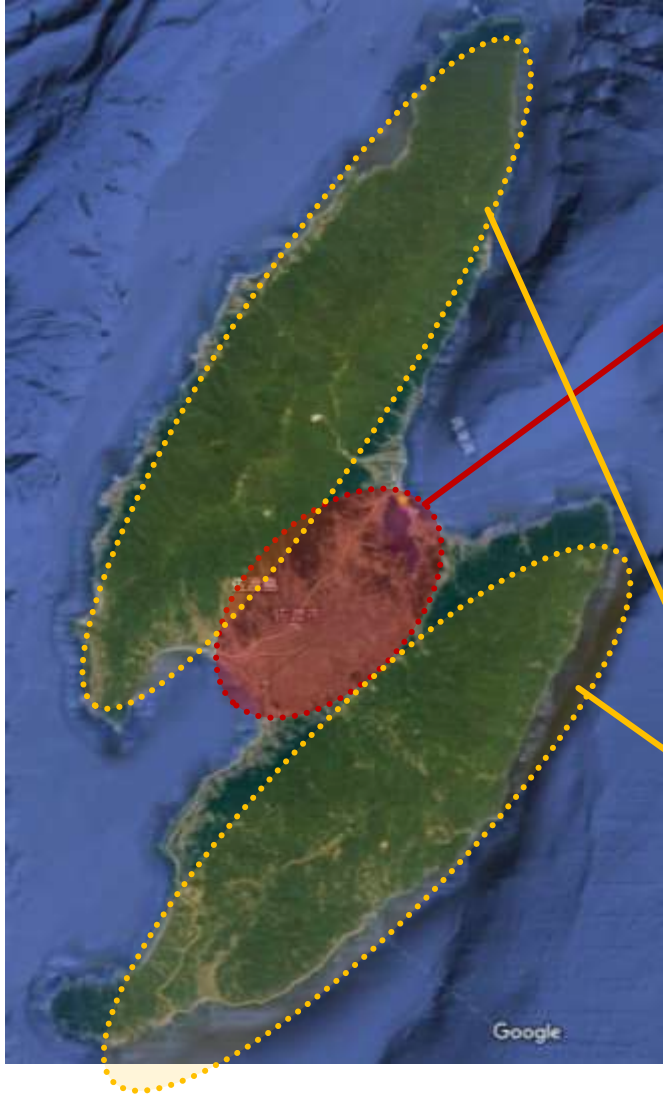
私たちが考える伝統建築とは、どのようなものを七つに分けてご紹介いたします。

1. 台風対策のための珊瑚石や生垣・防風林やブロックの塀
2. 分散型の配置計画
3. 平屋で入母屋の屋根形状
4. 高床
5. ヒキモン構造
6. 独特の平面計画
7. 奄美の材料



▼農業の再隆盛戦略：秋田県大潟村の行政視察を受けて

◆佐渡市としてのエリア別農業展望について



▼【秋田県大潟村モデル】

◆ナンバーワンの米づくり！！

- ・基盤整備による拡大継続による農業の大規模化
 - ・AI(人工知能)導入型大規模農業(GPS連動田植・稲刈機等)の実証実験フィールド
 - ・朱鷺と暮らす郷米のさらなる改善
- ⇒国仲平野の大規模農業スタイル『農で食べる！』

▼【全国棚田サミットモデル】

◆オンリーワンの米づくり！！

- ・集落米(棚田米)の生産と滞在型観光・農業体験との融合
 - ・AI(人工知能)導入型農業(小型機械、法面自動草刈機等)の実証実験フィールド
 - ・棚田米のさらなる改善、参加集落の増加
- ⇒棚田or準棚田の小中規模農業スタイル『農でつながる！』

▼林業の再隆盛戦略：アテビの特徴と特長

◆アテビの特徴について

- アテビ＝ヒノキアスナロ。サドアテビ、青森ヒバ、能登アテ、アテビ、アテ、ヒバ等の呼び名。
- 陰樹で、北限⇒北海道、南限⇒栃木県日光付近。
- 防腐・抗菌作用のあるヒノキチオール(含有量：1～2%)がヒノキよりも多い。
- 初期成長が遅い、耐陰性、耐雪害性、耐病害虫性が強い、浅根性。
- シロアリに強く、耐久性が高く、住宅の土台に最適。蚊なども寄せ付けない。
- スギでは10年で平均5mに達するが、アテビはその半分の10年で平均2.5m。
- 柱材では50年、造作材では70～80年での伐期を見込んで経営する必要がある。
- 挿し木の発根性が非常に高い。
- 他の植生を寄せ付けないアレロパシーを強烈に発散する樹種。
- 大佐渡、小佐渡の北斜面＝日陰であれば、下草刈り等のメンテナンスフリー。

【参考資料】佐渡のアテビの会作成「アテビの会結成10周年記念誌」、

石川県農林総合研究センター林業試験場作成「能登のアテ（能登ヒバ）」



【出典】日本デオドール株式会社公式サイト

- ◆アテビは成長が遅いため、長期スパンでの経営が必要であるが、短期スパンでも収益を得るビジネスモデルを構築することも重要。

- ◆ヒノキチオールの含有量(1～2%)が多い、という特性をフル活用するべき。

例：【地域産品】アテビの間伐材・端材を活用した風呂フタ、アテビのアロマオイル、(バイオマス発電)

【森林体験】フィトンチッド(癒しの効果)を体感するアテビの森体験、下草刈りや枝打ち体験

【制作体験】間伐材のコースター、表札、ストラップ、箸置き、キーホルダーづくり体験・・・他

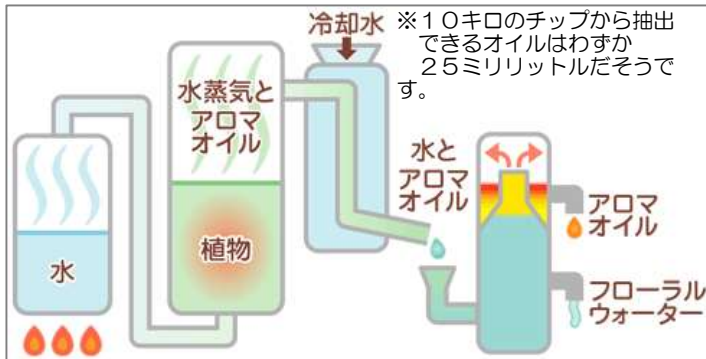
▼林業の再隆盛戦略：アテビ利活用の参考画像



【出典】ウェブサイト：四万十とおわ村 ※高知県の森林率：84%⇒はちよんプロジェクトとして様々な商品開発を展開中！

【出典】ウェブサイト：らしさ提案プロボット

- ご当地アロマとして、アテビのアロマオイル(アロマウォーター)を生産する。⇒女子旅のお土産に最適
- アテビの間伐材・端材を活用した風呂フタ⇒アテビの香りが漂い、ユニットバスのメンテナンスも楽。香りが薄くなったら、アテビのアロマオイルを風呂フタに振りかければ、また香りが風呂中に漂う。
- 製材は森林組合や、木材業者に依頼する。最終余材は、バイオマス発電に活用する。
- アロマオイル(アロマウォーター)生産は補助金を活用してプラント整備し、廃校等既存施設を活用する※実現化には、アテビの会、林業実践者大学、森林組合、民間企業、NPO、佐渡市等の多くの関係各所のご協力が必要です！



【出典】ウェブサイト：アロマ@癒し生活



【出典】ウェブサイト：kakuhon.exblog.jp & 無垢材の四国加工

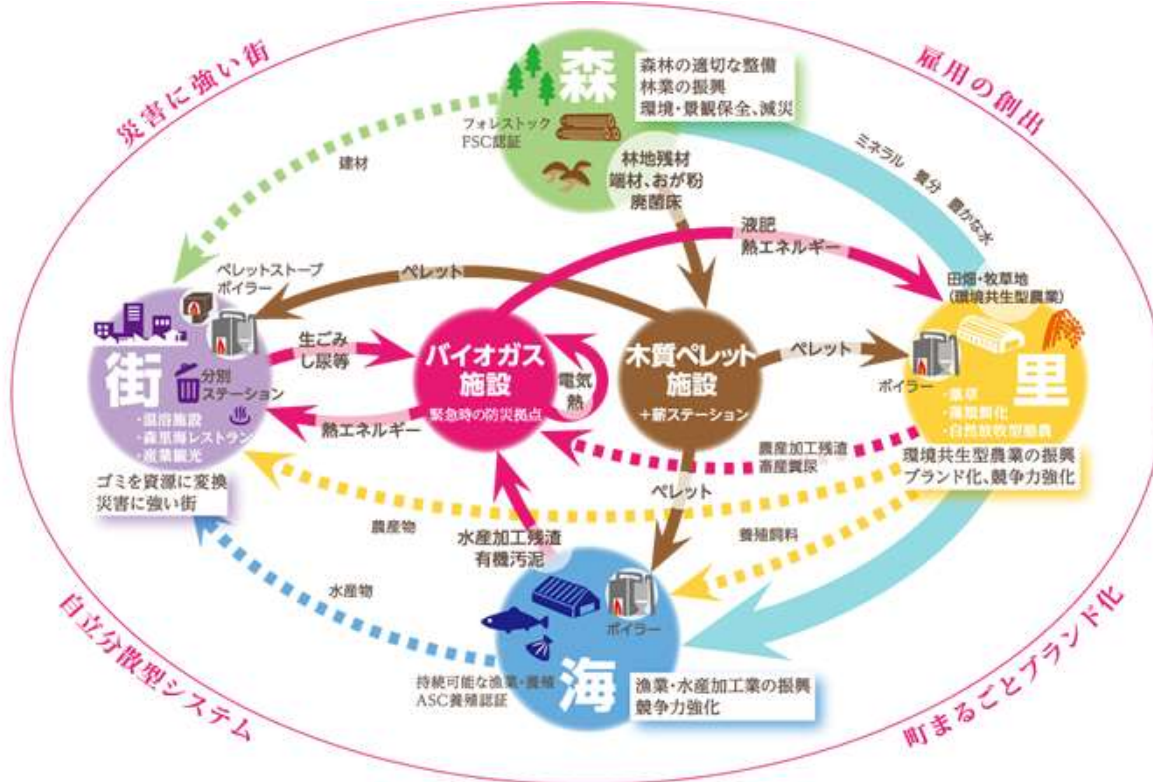


【出典】ウェブサイト：キシルネットワーク

▼水産業の再隆盛戦略：MSC漁業認証/ASC養殖場認証

◆『森は海の恋人』、『森川里海の考え方』について

◆MSC漁業認証/ASC養殖場認証について



「信頼できるガイドライン」によって証明されていることで、トレーサビリティや環境負荷といったことを確認することができ、納得して手にすることができます。

たとえばそれが水産物であれば、目に見える情報である魚種や値段のみならず、持続可能に資源管理されていることや、環境配慮がなされた資源であることがマークで明確に示されることで、消費者が安心して選択することができます。

【出典】南三陸町バイオマス産業都市構想



【出典】アミタホールディングス株式会社WEBサイト



【出典】CSR JAPAN

▼茶話会の流れについて

◆下記の三部構成とさせていただきます。

- 【第①部】午後3時 ~4時半：茶話会（昼の部）
- 【第②部】午後4時半~6時半：集落の魅力さがし学習会
- 【第③部】午後6時半~8時：茶話会（夜の部）

◆【茶話会（昼の部・夜の部）】の流れ

- 【1】05分：さどのめぐみ茶を飲みながら集落プロモーションビデオを鑑賞
⇒『佐渡アイランド集落ツーリズム構想』の世界観の共有をさせてください！
- 【2】25分：6・9・12月の佐渡市議会一般質問についてご説明
- 【3】45分：皆さんで車座となって諸問題についての意見交換
- 【4】15分：再度、集落プロモーションビデオを鑑賞し、
『あるかんか佐渡』をまわし読みした上で、
お住いの集落のムラスポットについて付せんで洗い出し

◆【集落の魅力さがし学習会】の流れ

4時半~6時半は室岡が会場に滞在しております。
両津郷土史、航空写真等を活用し集落の魅力を収集、
ムラ歩きとして巡る『ムラスポット』を整理します。
お時間ある方は是非とも魅力さがしにご協力ください。

上横山 2月1日(水) 上横山 集会所 ①②③	湍端 2月2日(木) 湍端地区 交流会館 ①② ③	下横山 2月3日(金) 下横山 集会所 ①② ③	長江 2月6日(月) 長江 公民館 ①②③	立野 2月7日(火) 両津地区公民館 立野分館 ①② ③	旭 2月8日(水) 旭集落開発 センター ①②③	秋津 2月9日(木) 秋津地区地域 文化伝承館 ①②③
--	---	--	--	--	---	--

▼【提案】NPO両津吉井応援団(仮)の概要について

◆※集落経営を考える際に、全島に24ある『小学校区』という単位で考えられないか・・・

『小学校区』というコミュニティを大切にすることによって
佐渡の集落での活動を永続的に残すことができないかと考えます。
そこで、NPO両津吉井応援団(仮)を結成し、下記5点に取り組む提案です。

- ①集落毎の字会計や各種行事案内資料の統一フォーマット化、データ化
 - 【A】秋津、旭、湍端、上横山、下横山、立野、長江（五十音順）の字会計（※各集落独立の別会計、非公開）
 - 【B】ムラ歩き事業会計（集落の魅力を発掘し、ムラ歩きガイドを行う等）
 - 【C】簡易宿所事業会計（古民家を再生し、宿泊施設に活用する等）
- ②ムラ歩き事業⇒【B】
佐渡アイランド集落ツーリズム構想実現のため、
あるかんか佐渡、さどんぼ等の取り組みを両津吉井地区でも行う
体験コンテンツを発掘し、集落の魅力を体験できるようにする
- ③簡易宿所事業⇒【C】
空き家利活用、古民家再生、宿泊を推進する
※簡易宿所は、食材提供であればOK、お料理提供はNG
- ④両津郷土博物館の利活用
郷土博物館機能に加え、NPOの事務局の拠点としても活用する
- ⑤両津吉井産のお土産の開発・製造
チャレンジド立野、さどのめぐみっ茶等の好事例を参考にお土産をつくる

▼茶話会の完了報告について

◆平成29年2月1日（水）～2月9日（木）まで
両津吉井地区の7集落にて茶話会を開催！

7集落で合計11回の茶話会の開催。
延べ65名の皆さんで昼・夜と意見交換をさせていただきました。
貴重なご意見・ご質問・ご提案をいただき、大変勉強になりました。本当にありがとうございました！

地元の方に、たくさんの集落の魅力についてお教えいただきましたので、集落のガイドブックをつくるべく、まとめの作業をして参ります！
理想は『あるかんか佐渡』レベルまで行ければ良いと思っております。※右下画像参照

※平成28年度の茶話会は、両津吉井7集落のみの開催とさせていただきます。ご了承ください。
来年度以降は、他地域でも開催する予定です。
来年度の茶話会開催ご希望があれば、是非ともお声掛けください。

【連絡先】室岡ひろしと佐渡の明るい未来をつくる会
室岡啓史：090-9335-9519



▼【画像①】和歌山県田辺市の行政視察



「田辺市熊野ツーリズムビューローの構成図
こうした組織構成は、全国的にも珍しく注目を集めている。また、田辺市では、「官民協働」で田辺市の情報を世界に向け発信する取り組みとして位置づけている。
出典)田辺市熊野ツーリズムビューローHP(2010/03/30参照)
<http://www.tb-kumano.jp/booklet/TB-kumano.html>

▲5つの観光協会とツーリズムビューローの関係性



「田辺市熊野ツーリズムビューロー事務局の皆さん
左端は、国際観光推進員のブラッド・トゥル氏、外国人の起用が目玉とされ、メディアの取材を多数受けていることから、それが田辺のPRにもなっているようだ。



「熊野古道
外国人の個人旅行者で熊野古道を訪れる人は、4~5日かけて歩く人が多い。
出典)田辺市熊野ツーリズムビューロー

▲ビューロースタッフの皆さんと熊野古道



「『指差し会話帳』の一部「温泉旅館「上御殿」のもの
支払い方法、食事の時間・場所・温泉の入り方等の説明が日本語と英語で書かれている。このほか、宿の歴史や食事のメニューを説明したもの等もある。
出典)田辺市熊野ツーリズムビューロー資料

▲『指差し会話帳』と外国人向け総合パンフレット



「田辺市・熊野の総合パンフレットの一部
日本地図一関西地方の地図一紀伊半島の地図と、日本の地理を知らない外国人にも分かりやすいようになっている。
出典)田辺市熊野ツーリズムビューローHP(2010/03/30参照)
<http://www.tb-kumano.jp/booklet/sacred-kumano.html>



「現在の田辺熊野TBの英語版のHP
パンフレットやマップはダウンロードすることができるので、印刷したものを持って現地を訪れる外国人旅行者もいる。

出典)田辺市熊野ツーリズムビューローHP(2010/03/30参照) <http://www.tb-kumano.jp/index.html>

▲ビューローの英語版HPと日英表記のパンフレット



「田辺市・熊野の総合パンフレット(日英併記)
マップの英語版も日英併記にして、外国人旅行者が日本人にたずねても分かるようにしてある。

▲ビューロースタッフの皆さんと熊野古道



＜田辺市へのアクセス＞
 ■飛行機の場合
 羽田空港から南紀白浜空港まで約70分、南紀白浜空港から田辺市までバスで約40分
 ■電車の場合
 新大阪駅から紀伊田辺駅までJRで約2時間
 ■バスの場合
 大阪駅から紀伊田辺駅まで約3時間



▼サンティアゴ・デ・コンポステラ市観光局とビューローの共同会見



▲田辺市へのアクセス



↑プレスツアーの様子
 田辺熊野TBとして、戦略的に行うものもあれば、国や県のプレスツアーのサポートを務めることもある。



↑ジャンボポスターの掲示(都市部観光宣伝事業の一環)
 JR大阪・天王寺駅構内に掲示された。市内の目玉となる観光資源が立体に描かれているインパクトのあるデザイン。

出典)田辺市熊野ツーリズムビューロー

↑サンティアゴ・デ・コンポステラ市観光局と田辺熊野TBの共同記者会見の様子
 時代衣装を身に付けて行われた記者会見は多くの関心を集めた。また、共同で作成されたパンフレットは、サンティアゴ・デ・コンポステラ市観光局を通じて広く配布された。その成果もあって、ここ2年間はスペイン人の旅行者が多くなっている。

出典)田辺市熊野ツーリズムビューロー



↑外国人旅行者への対応のレベルアップを図るワークショップの様子
 左が熊野本宮大社を対象としたもの。右が宿泊施設対象のもの。参加者の中には、以前は外国人旅行者に対する抵抗感があったものの、ワークショップ参加後は、大変な中にも楽しさを見出して受け入れてくれるようになったところもある。

出典)田辺市熊野ツーリズムビューロー

▲プレスツアーやジャンボポスターの様子

▲レベルアップを図るワークショップの様子

▼【画像③】和歌山県田辺市の行政視察



▲委員長によるご挨拶と担当者によるご説明



▲紀伊田辺駅隣り田辺市観光センター内観



▲紀伊田辺駅隣り田辺市観光センター外観



▲田辺市熊野ツーリズムビューロー受付前

▼【所感①】和歌山県田辺市の行政視察

▼紀伊田辺駅隣にある一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー（以下ビューロー）の皆さまよりヒアリングした概要について

世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』、通称“熊野古道”。平成27年には『みなべ・田辺の梅システム』が、世界農業遺産（GIAHS）に認定され、世界遺産と世界農業遺産の二つの冠を保持している。

ビューローは田辺市内五つの観光協会とは別組織で、

インバウンド（外国人観光）に特化した持続可能な背伸びをしない観光スタイルを確立。

欧米豪を中心として戦略的に海外メディア向けプレスツアー等を開催しながら、

外国人個人観光の熊野古道ウォークトレイルを実践。

また、受け入れる地元の民宿やガイドの方々には、ワークショップを開催しながらお困りごとをヒアリングして、

指差しだけで宿内の案内ができる紙面を作ったり、地道な努力を重ね続けておられるとのこと。

今後立ち上がる佐渡版DMOの在り方について大いに参考となった。

▼紀伊半島の奥地という言わば『陸の孤島』の環境を逆手に取った戦略について

東京・大阪のメインルートからわざわざ行かないとたどり着かない場所であることで、

伝統文化を守るフィルターになったと解釈しているとのことである。

ゴミのポイ捨て等がなく、文化財を守る意識の高い人のみがか来てくれるそうである。

結果的にDMO・DMCの先進地となり、約10年間で昔の良さを取り戻すことができた、とのこと。

⇒半島≠島として、佐渡としても同様の解釈をした上で、観光のお客様のターゲティングおよび誘客を行う必要があると感じた。

▼世界的にも珍しい『道』の世界遺産について

巡礼地として歩くことでのみ感じることができる。

逆に言えば、『道』しかないということに全ての心血を注ぎ、

インバウンド観光に特化した観光地域づくりを推進していると言える。

課題としては、道は荒れるが、文化財であるために簡単には直せないということだそう。

CSR（企業の社会的責任）事業として、首都圏等の企業の関係者による古道の修繕等の活動も始まっている。

また、『道』の世界遺産として共通する、

スペインの世界遺産『サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路』

とのスタンプラリー等による連携・国際交流等も積極的に行っている。

▼ありのままのおもてなしを実践

平成17年（2004年）に世界遺産登録、世界遺産に向けて観光客が増えてきた。

2015年で宿泊：44.3万人泊を記録、2016年はそれを上まわっている。

熊野古道の民宿は、無理にスタイルを変えない。

ベッドなどは設置せず、畳・布団・風呂・食事など日本の文化を体験できるようにしている。

ただし、トイレについては洋式水洗化を進めている。

和歌山県として水洗化に積極的で、全県で数十億の予算、

田辺市としても連携する方針で約3億円ほどの予算を割いた。（公共トイレの水洗化を県と市とで折半）

課題としては、ハイエンド層に対応できる宿泊施設がないことだそうだ。

（建設の計画はある、とのことである。）

▼早期にビューロー事務局にカナダ人を採用した戦略について

ALT（英語指導助手）として地元の小中学校に勤務、熊野の歴史等を熟知している

ブラッド・トウル氏をビューロー設立からまもなく職員として採用した。

インバウンド対応の抜本的な見直しのため、

①観光に関する情報収集と整理

②現地のレベルアップ

③観光プロモーションを展開

によって世界に開かれた観光まちづくりが始まった。現在は、日・英・中・韓・仏の5カ国語に対応したホームページ、パンフレット、マップ、ポスター等を通じて情報発信に努めている。

▼2年間で延べ60回開催されたワークショップの内容について

研修会を複数回開催し、関係者の意識を高めるための努力をしてきた。

ブラッド氏を始めとするビューロー事務局スタッフが内容の改善を行なってきた。

まずは『皆さんのお困りごとはありませんか？』から始めて、

関係者の方々と膝をつき合わせて話し合うことで、改善点やアイデアを整理し形にする努力を続けてきた。

その中で指差しツールを作成し、英語が話せなくとも外国人とのコミュニケーションが取れる工夫等を

数多く行なっている。

▼ビューローと観光協会の関係性・役割分担について

田辺市は、2005年（平成17年）5月1日に、日高郡龍神村・西牟婁郡中辺路町・大塔村・東牟婁郡本宮町と合併し、5つの市町村によって田辺市が発足した。

観光協会は、旧市町村の5つのままであり、各地域の特性を生かした観光PR活動等をそれぞれが行っている。一方、ビューローは5つの観光協会に横串を刺すように連携し、インバウンド観光の対応に特化した組織として運営しているため、業務の重複や軋轢等は特になく、5つの観光協会との住み分けはできているそうである。

▼お客様と宿泊施設とをつなぐビューローの役割について

ビューローの決済は、全てクレジットカード決済である。システムを一から構築し、オリジナルシステムで運用。

全て事前予約として預かり、いわゆるドタキャンについては、キャンセル料を差し引いてお客様にお返しする仕組みを導入している。

手数料については、一般のエージェントが約15%前後であることにに対し、ビューローは10%と、約5%ほど手数料を少なくしているそうである。

また、ビューローは、宿泊施設の部屋在庫を抱えないスタイルであり、予約が入った場合は、ビューローは、宿泊施設へ電話・FAX等でやりとりをして、在庫確認および予約決定をしているとのことで、言わば効率の悪い大変手間のかかる作業を代行していると言える。

▼インバウンド観光に必要な不可欠なwi-fiの整備状況について

和歌山国体開催（2015年）との兼ね合いもあり、行政主導により県と市の連携により設置拡大を進めている。具体的には県が1/2補助を行い、商店街や宿泊施設等の民間にwi-fiの設置を推奨している。

お客様を受け入れる上では必要不可欠であり、SNSですぐに情報発信ができるようにすることの重要性を鑑み、田辺市としても積極的に推進しているため、ほぼ完了しているという状況である。

▼インバウンド観光を突き詰めると、バリアフリー・ユニバーサルデザインへとたどりことについて

今の課題は『ニッポン』対応。

外国人観光客が相対的に増加することで、巡礼地の熊野古道に日本人があまりいないという状況になっている。そこでアクティブな30代の日本人観光客を呼び込む戦略を考え、工夫を始めつつある状況である。